

# 教科書の中にある群馬の遺跡

## ——教育施設における展示とその映像化について——

能 登 健・原 雅 信

### 1. はじめに

地域教材を活用した学校教育の提唱に応じて、埋蔵文化財の教材化が要望されている。<sup>(1)</sup>しかし、発掘調査の成果である「調査報告書」を利用して教材研究の基礎資料としようとしても、それが学校の教師にとっては決して容易なものではないことも事実である。埋蔵文化財である遺跡や遺物は、一義的には「考古学」の研究対象となる。すなわち、発掘調査の成果は極めて専門的な内容となって公表されることから、当然のこととして考古学の学習を経ずに「調査報告書」を活用しようとすると、多くの困難を生じることになる。

埋蔵文化財は「考古学研究の資料」としての側面とともに、地域社会の成り立ちを具体的に示す「地域学習の資料」としての側面も重要なものである。この意味から考古学的研究に加えて、新たに地域教材化への研究の必要性が生じることになる。筆者らは、この方向性を「考古学」に<sup>(2)</sup>対して「埋蔵文化財学」の確立として位置づけている。

本稿では、この方向性のもと、教科書に掲載されている埋蔵文化財の教材化を目的に行った群馬県総合教育センター「教科書にみる群馬の遺跡」の展示とテレビ番組「教科書の中にある群馬の遺跡」のシナリオ原案の二つの実践例を示すこととする。

なお、この報告は児童・生徒へのアプローチとしてではなく、指導する側である教師への提案もしくは問題提起を目的としたものである。

### 2. 社会科・日本史教科書の調査について

「教科書の中にある群馬の遺跡」のテーマに沿って、小・中・高等学校の社会科・日本史および国語、美術の教科書に掲載される群馬県に関連する考古資料を調査した。教科書は、群馬県立図書館、群馬県総合教育センター、前橋市教育研究所などの所蔵図書を利用した。そのうち社会科・日本史教科書に掲載されている内容は、表1のとおりである。

小学校6年の社会科は、平成3年検定本と平成7年検定本を対象としている。いずれの教科書でも旧石器時代は扱われておらず、歴史学習は縄文時代から始まっている。古墳時代には太田市から出土した武人埴輪や、赤堀茶臼山古墳出土の家形埴輪が代表例として掲載されている。特徴的には平成3年度検定本に比べ平成7年度検定本には、ほとんどの教科書に前方後円墳の分布図が掲載されている点である。この分布図からは、当時の社会（政治）の中心が西日本にあったことが理解されるとともに、東日本では群馬に古墳が集中する傾向が示されている。また、県内の資料ではないが、縄文土器づくりや火おこしが体験学習として取り上げられていることが大

表1 小学校・中学校・高等学校の教科書に掲載される群馬の遺跡

小学校 社会科教科書

教科書名	検定年	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	中世
小学社会6上 大阪書籍	平成3年				「いろいろなはにわ」写真 武人・農夫	
わたしたちの小学社会6上 日本書籍	平成3年				「くわをかついた農夫」写真	
新版社会6上 教育出版	平成3年				「よろいかぶとをつけた武人のはにわ」写真	
国土のあゆみ6上 中教出版	平成3年				「武人のはにわ」写真	
新編新しい社会6上 東京書籍	平成7年				前方後円墳の分布図	
社会6上 新育出版	平成7年				前方後円墳の分布のようす 武人埴輪写真	
社会6上 光村図書	平成7年				古墳の広がり（分布図） 武人埴輪写真	
日本のあゆみ 小学生の社会6上 日本文教出版	平成7年				前方後円墳の分布図	
小学社会6上 大阪書籍	平成7年				家形埴輪、農夫埴輪、犬埴輪写真 古墳の分布図	

中学校 社会科教科書

教科書名	検定年	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	中世
新しい社会 歴史 東京書籍	平成4年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			前方後円墳の分布図「毛野」 三ツ寺I遺跡	
中学校社会 歴史 学校図書	平成4年	岩宿遺跡 相沢忠洋				
社会科 中学生の歴史 帝国書院	平成4年				武人埴輪 古墳の分布図「毛野」	
中学社会 歴史的分野 日本書籍	平成4年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム				
日本の歴史と世界 清水書院	平成4年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			武人埴輪、巫子埴輪 三ツ寺I遺跡	
中学社会 歴史的分野 大阪書籍	平成4年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			古墳の分布図「毛野」	
日本のあゆみと 世界歴史 中教出版	平成4年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			武人埴輪	
新版中学社会 歴史 教育出版	平成4年	岩宿遺跡			農夫埴輪 前方後円墳の分布図「毛野」	
新編新しい社会 歴史 東京書籍	平成8年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			武人埴輪 前方後円墳の分布図「毛野」 多胡碑、観音塚古墳（史跡地図）	
社会科中学生の歴史 帝国書院	平成8年	岩宿遺跡			武人埴輪 古墳の分布図「毛野」	

教科書名	検定年	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	中世
中学生の社会科 歴史 日本文教出版	平成8年	岩宿遺跡			武人埴輪、盛装した女性の埴輪、家形埴輪 古墳の分布図「毛野」	
中学社会 歴史 教育出版	平成8年	岩宿遺跡			武人埴輪、家形埴輪 前方後円墳の分布図「毛野」 黒井峯遺跡、金井沢碑、多胡碑（史跡地図）	
中学社会 歴史的分野 大阪書籍	平成8年	岩宿遺跡			武人埴輪、家形埴輪 古墳分布図「毛野」	
中学校 歴史 清水書院	平成8年				武人埴輪 前方後円墳の分布図「毛野」 豪族の館（三ツ寺I遺跡）	
中学社会 歴史的分野 日本書籍	平成8年	岩宿遺跡				

### 高等学校 日本史教科書

教科書名	検定年	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳時代	中世
日本史最新版 清水書院	平成4年	岩宿遺跡				女堀
新版高校日本史 日本書籍	平成5年	岩宿遺跡			家形埴輪 塚廻り古墳	
日本史B 実教出版	平成5年	岩宿遺跡 権現山遺跡			王冠をつけた男性の埴輪 黒井峯遺跡	
日本の歴史 山川出版	平成5年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム	ハート形 土偶		武人埴輪、巫子埴輪、家形埴輪 三ツ寺I遺跡	
高校日本史 日本史B 山川出版	平成6年	岩宿遺跡	ハート形 土偶	日高遺跡	前方後円墳の分布図 巫子埴輪、家形埴輪	
日本史B 東京書籍	平成6年	岩宿遺跡		日高遺跡		
精選日本史B 第一学習社	平成6年	岩宿遺跡 相沢忠洋			武人埴輪、犬埴輪 三ツ寺I遺跡	
高校日本史B 実教出版	平成6年	岩宿遺跡 岩宿の発見コラム			武人埴輪	女堀
新日本史B 三省堂	平成6年	岩宿遺跡	ハート形 土偶		武人埴輪 大型古墳の分布図、太田天神山古墳 盛装した女性の埴輪	
新考日本史B最新版 帝国書院	平成6年	岩宿遺跡 相沢忠洋			大型古墳の分布図 黒井峯遺跡 三ツ寺I遺跡	
新選日本史B 東京書籍	平成6年	岩宿遺跡 相沢忠洋		日高遺跡	武人埴輪	

きな特徴となっている。

中学社会科教科書は、平成4年検定本と平成8年検定本を調べた。旧石器時代（先土器時代）の項にはほとんどの教科書に岩宿遺跡が掲載される。さらに岩宿遺跡の発見者である相沢忠洋の業績に触れるものもある。古墳時代では、武人埴輪や家形埴輪、巫女埴輪および前方後円墳の分布図が掲載される。資料的には小学校の事例と共に通るものといえるが、分布図中には東日本の集中地域として「毛野」の記載がみられ、豪族の館として三ツ寺I遺跡が掲載されているものもある。

高等学校の日本史教科書は、平成5年検定本、平成6年検定本を取り上げた。旧石器時代にはすべてに岩宿遺跡が掲載されるとともに、相沢忠洋の業績に触れるものも多い。縄文時代には山川出版版、三省堂版にハート形土偶が掲載されている。弥生時代は、平成6年検定の山川出版『日本史B』、東京書籍『日本史B』に代表的な遺跡の1つとして日高遺跡が掲載されている。古墳時代には、三ツ寺I遺跡・塚廻り古墳・太田天神山古墳・赤堀茶臼山古墳・観音塚古墳・黒井峯遺跡および武人埴輪、巫女埴輪、家形埴輪などが各教科書に掲載されている。教科書により使用される資料は多少相違があり、それが各教科書の特徴になっている。例えば、実教出版『日本史B』（平成5年検定）と帝国書院『新考日本史最新版』（平成6年検定）には黒井峯遺跡、日本書籍『新版高校日本史』（平成5年検定）には塚廻り古墳の埴輪配列図が掲載されている。その反面、武人埴輪や家形埴輪などの形象埴輪については、小学校および中学校の社会科教科書の掲載資料と同様のものも目につく。さらに、大型古墳の分布図も多く教科書に掲載されているが、代表的な古墳の記載などがあり小学校や中学校のものと比較すればより詳細にはなっているものの、基本的には差はないものといえる。中世では、女堀が清水書院『日本史最新版』（平成4年検定）と実教出版『日本史B』（平成6年検定）に採用されている点が注目される。

### 3. 群馬県総合教育センターの展示について

群馬県における抜本的な教育改革の中核的存在として、平成6年に群馬県総合教育センターが開設された。学校教育をはじめとして県民の文化活動への支援など生涯学習を含めた拠点となる施設でもある。このセンター内の学習スペースに「教科書に見る群馬の遺跡」をテーマとしてパネルを中心とした展示を行った。群馬の遺跡が掲載されている教科書を並べるとともに、そこに掲載されている遺跡の解説パネルと参考資料として縄文土器や埴輪などの遺物もあわせて展示した。

パネル展示の遺跡は、岩宿遺跡、ハート形土偶、三ツ寺I遺跡、太田天神山古墳、塚廻り古墳、女堀の6遺跡とした。

以下、その内容について報告する。

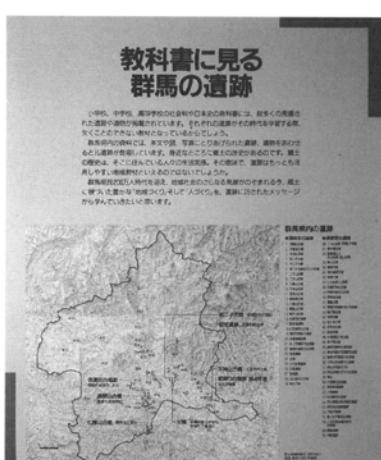
## パネル1 教科書にみる群馬の遺跡

小学校、中学校、高等学校の社会科や日本史の教科書には、数多くの発掘された遺跡や遺物が掲載されています。それぞれの遺跡がその時代を学習する際、欠くことのできない教材となっているからでしょう。群馬県内の資料では、本文や図、写真にとりあげられた遺跡、遺物をあわせると15遺跡が登場しています。身近なところに郷土の歴史があるのです。郷土の歴史は、そこに住んでいる人々の生活実感。その意味で、遺跡はもっとも活用しやすい地域教材といえるのではないかでしょうか。群馬県民200万人時代を迎え、地域社会のさらなる発展がのぞまれる今、郷土に根づいた豊かな「地域づくり」そして「人づくり」を、遺跡に託されたメッセージから学んでいきたいと思います。

これが展示の基本的な考え方である。遺跡や遺物から地域の歴史を学ぶとともに、現代の社会を考えるための資料としても位置づけることで教材化をはからうとした。このような方向性が、学校教育への情報提供の一つの方法であると考えたからである。

## パネル2 岩宿遺跡……旧石器研究の幕開け

岩宿遺跡は、日本に旧石器時代が存在することをはじめて証明した記念碑的遺跡。だから、ほとんどの教科書に岩宿遺跡が掲載されている。その後も人間探求の研究は進み、最近では宮城県高森遺跡で50万年前の石器が発見され話題となっている。岩宿で開かれた旧石器研究の扉は着実に歩を進め、今では日本列島の「人間学」の原点になりつつある。アマチュア考古学者相沢忠洋氏によってなされた“岩宿の発見”は、当時の人々に歴史へのロマンを提供するだけでなく、大きなはげみをも与えた。なぜなら、学問が研究者のみのものではなく、地域を探求するまなざしの中にもあるということを教えてくれたからだ。ここに教育の原点をみることもできるだろう。



パネル1



180 *Ilia T. 2*

昭和21(1946)年に相沢忠洋により発見された岩宿遺跡は、昭和24(1949)年に明治大学により発掘調査が行われた。昭和31(1956)年には調査報告書が刊行されている。この間も、学会での発表や新聞などでの報道で全国的な話題となっていた。ま

た、相沢忠洋著『岩宿の発見』が多くの人々に読まれることで、さらに関心も高まつていった。なお、昭和42(1967)年に相沢忠洋は、岩宿遺跡の発見という画期的な功績により吉川英治賞を受賞している。

岩宿遺跡が教科書に掲載されるのは昭和31年頃からのようなである。ちなみに、昭和30年度版山川出版『再訂日本史』には触れられていない。また、昭和29年5月1日発行の群馬県小学校社会科教育研究会編『社会科副読本私たちの群馬県』にも岩宿遺跡の調査成果をみることができない。初めて日本の旧石器時代の存在を証明し、社会的にも大きな話題となった遺跡であるが、教科書への採用はやや遅いようにも思える。この経緯についてはあらためて考察する必要があるが、発掘調査の研究成果である調査報告書の刊行が教育資料化への前提になったものと考えられる。このことは、吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡などマスコミを中心に大きな話題を提供した遺跡について比較的早く教科書に採用されていく近年の動向と対照的でもある。

昭和31年以降は、中・高校のほとんどの教科書に掲載され現在に続いている。日本の旧石器時代の存在を証明した最初の遺跡として今後とも掲載されいくだろう。さらに、中学校や高等学校の教科書では、岩宿の発見の経緯が掲載されるものが多く、アマチュア考古学者である相沢忠洋がそれまでのアカデミズムの常識をくつがえしたということも重要な要素となっている。このことは、自ら学ぶことの大切さを具体的にものがたる教材として活用しているものといえる。<sup>(3)</sup>

### パネル3 ハート形土偶……縄文人のこころを探る

自然とともに暮らす縄文人は、社会の秩序を呪術という信仰に求めた。呪術とは、超自然の力をかりて生活の安定を実現しようとする信仰。「土偶」をはじめ「土版」や「石棒」などの信仰遺物がつくられた。女性像である土偶は、生命誕生の神秘性を具現化し、生きるということへの真摯な思いが表現されている遺物だ。ハート形土偶も女性を表現しているが、全体の造形はみごとに抽象化されている。実用的な道具は、より機能的に変化する。そして、信仰の道具は、より抽象化の方向性をたどる。顔をハート形にまで抽象化した土偶からは、縄文時代に高度に発達した信仰体系と芸術が存在していたことを理解できる。“生命誕生の喜びと尊厳”。このことを4千年前の土偶から学びとろう。

吾妻郡吾妻町の郷原遺跡から出土したハート形土偶は、その優れた造形から縄文時代の代表的遺物となっている。現在は国の重要文化財に指定され、東京国立博物館に展示されている。

土偶の性格については、怪我や病気の治癒を願ってその部分を壊したとする身代わり毀損説をはじめとしていくつかの説がある。しかし、土偶がいずれも女性像で、さらに妊娠を表現する例も多くみられることから、生命誕生に関わる呪術具と考えておきたい。縄文人たちにとって新たな生命の誕生は極めて重要な問題であったはずである。なぜなら、それは自らの社会の存続に直接影響をおよぼすことになるからである。このことは、縄文時代ばかりでなく現代をも含めてどの時代にあっても大きな課題となることだろう。人間社会や生命というものを再考する際にも土

偶は有効な教材となり得るのではないだろうか。

また、芸術的側面からもその抽象的造形について分析を加えることも可能であり、社会科ばかりではなく美術の教材としても活用できるものといえる。このような観点でみれば他の土偶についても美術教材の対象とすることがされることになる。例えば、多くの教科書に採用されている青森県の遮光器土偶の目の表現についても、やはり抽象的な造形としての見方によって有効な教材化がはかれるものといえる。

#### パネル4 三ツ寺I遺跡……荒ぶる勇者たちの拠点

三ツ寺I遺跡は、古墳時代の豪族の居館。かつて誰も目にしたことがなかったまぼろしの館がここに姿を現したのだ。「巨大な古墳をつくらせた豪族はどのような家に住んでいたのだろう。」今まで赤堀茶臼山古墳（佐波郡赤堀町）などから出土した家形埴輪群から推定するのみであった。県内各地の豪族が、水田の開墾を背景にして覇を競っていた5世紀。三ツ寺の豪族は、農業用水を求めて河川移動という大土木工事を完成し、生産域の拡大に成功した。堀と石垣による堅固な館は、政治や農業祭祀などを執り行う拠点だった。その壮大な姿は、農業社会の構造と地域支配の実態を雄弁に物語っている。

群馬郡群馬町にある三ツ寺I遺跡は、昭和56年に発掘調査が行われ、昭和63年には調査報告書が刊行されている。三ツ寺I遺跡は、古墳時代の豪族居館というものを具体的に示す資料として重要な遺跡である。教科書には復元図が掲載されるが、地域支配の拠点としての館の構造が視覚的にも理解しやすいものとなっている。

これまで、古墳時代の学習においては豪族の墓である古墳そのものがクローズアップされがちであった。しかし、群馬県における黒井峯遺跡や古墳時代の水田の発掘調査によって、豪族居館、農民の村そして中心的な生産の場である水田、という古墳時代に完成する農業社会の構造を学習することができるようになったことが重要な点となっている。<sup>(5)</sup>



パネル3



パネル4

## パネル5 太田天神山古墳……死しても霸を競う豪族たち

前方後円墳は、豪族の墓であり、地域支配の象徴として造られた。労働力の掌握と水田開発で生産力を拡大しつづけた豪族たちは、我が力を死して眠る古墳にも誇示した。つまり、古墳の大きさは、そこに眠る豪族の生前の支配力をも示していることになる。太田天神山古墳をみよう。周囲には良好な水田地帯が見渡す限り広がっている。この生産基盤を背景に東国最大の前方後円墳が成立したことが読みとれるだろう。県内各地で豊かな水田地帯が広がるところにも、多くの大古墳をみることができる。いづれも、その地域のもつ生産基盤を背景として造られているのだ。



### パネル5

小・中・高校の教科書に、大型古墳の分布図が掲載されている。これをみるとその分布が西日本に集中していることがわかるとともに、当時の社会の中心がこの地域であったことも理解できるだろう。そして、東日本では群馬に集中する傾向も読みとれる。この東日本で最大級の古墳が全長210mの規模をもつ太田天神山古墳である。

古墳は古墳時代の象徴的存在であるが、それが時代のすべてではない。古墳時代の学習には、すでに述べたような農業社会の構造を理解することが前提となるが、実はもう一つの側面も指摘しておかなければならぬ。

教科書には大型古墳が資料として採用されているが、これ

れはどこにでもあるとは限らない。地域に存在する古墳をみると、大型古墳もあれば小古墳もあることに気づくだろう。群馬県内での大型古墳と小古墳の分布域を分析すると、農業社会における一地域内での詳細な地域偏差を理解することに役立つことがわかる。もちろんこの差異は、その後の地域差の基盤となるからである。地域に残る古墳は、その地域の成り立ちを学習する糸口(6)を与えてくれる教材となるものといえる。

## パネル6 塚廻り古墳……埴輪群像の語るもの

埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪は、古墳の周囲に並べられ墓域を画し、被葬者を邪気から守る目的をもつ。形象埴輪は人物、武器、家、馬などを模して、王位継承の儀式や生前のような葬送の儀礼を表現したものだ。だから、埴輪の意味を探るには、古墳にどのように配列されていたのかを見る必要がある。塚廻り古墳はこのことを理解するのに重要な古墳だ。埴輪群は、墓前の祭りが行われる前方部に配列されている。大刀や壺を持つ女、踊る女、ひざまずく男などの人物埴輪よって儀式のようすをうかがうことができる。また、形象埴輪は、当時の服飾や道具などを理解するうえで重要な資料ともなっている。

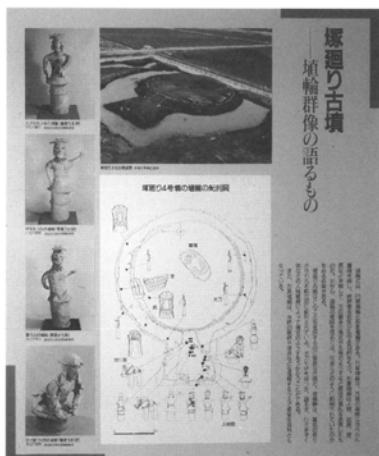
太田市竜舞にあり昭和51(1976)年に発掘調査され、昭和55(1980)年には調査報告書が刊行されている。全長約22mの小規模な古墳であるが、最大の特徴は配列された埴輪群が比較的良好な状態で残存していた点である。教科書には古墳時代の項には必ず埴輪が掲載されている。具象的な造形であるため、最もわかりやすい考古遺物の一つかも知れない。しかし、武人埴輪などが単体で掲載される教科書が多く、埴輪が古墳の上にどのように置かれたのかは理解しにくいものとなっている。その中で日本書籍『新版高校日本史』には塚廻り古墳の埴輪配列図が掲載されている。埴輪は、この図のように様々な形態のものがそれぞれの役割をもって古墳の上に立て並べられていたのである。埴輪群像は、葬送儀礼や政権交代などに伴う儀式の様子を再現していることになる。同時に、当時の生活様式や風俗などを具体的に学習することができる希有の資料ともなっている。

#### パネル7 女堀……あくなき生産への意欲

12世紀の浅間山の噴火は、群馬県全域に甚大な被害をおよぼした。「国内の田畠はほとんどが滅亡してしまった」と、古文書にも書き残されている。女堀は、この火山災害で疲弊した水田の再開発を目的に開削された、巨大な農業用水路である。取水地域は前橋市石関町付近。桃木川説や藤沢川説がある。送水地域は淵名荘。赤城の裾野を延々13kmにわたり開削されているが、未完成のまま挫折した。12世紀は新たな時代の胎動期。難工事を強行した背景からは、あくなき生産への意欲と、そして中世の活発な荘園開発のドラマを読みとることができるものだろう。

群馬県は過去に大きな火山災害を被っている。このことは発掘調査によっても明らかにされており、火山灰下の遺跡が多数調査されている。

1108(天仁元)年の浅間山の噴火による降灰は、県内の平野部を埋めつくすという甚大な被害を与えた。噴火後の疲弊した地域での水田耕地の再開発のためには大量の用水が不可欠となる。女



パネル6



パネル7

堀は、そのために開削された河川からの大量給水を目的とした用水路である。

昭和54(1979)年に発掘調査が実施され、昭和60(1985)年には調査報告書が刊行されている。この調査成果により、未完成であった事実の検証をはじめ、土

木工法や掘削工程さらに全体の構造および歴史的背景などの総合的分析が可能となった。さらにこの成果は地域における歴史実態を解明するとともに、中世史研究の重要な歴史資料ともなって<sup>(7)</sup>いる。

また、女堀の開削が失敗していたという事実を前提に、広域にわたる地域開発のあり方を考えると、それは現代的な問題提起としてとらえることも可能となる。以前、筆者らはこのことを女堀という挫折した大土木工事を歴史の証人として、地域開発というもののあり方を考えるという<sup>(8)</sup>視点で新聞紙上で述べたことがある。女堀は、学校教育での教材のみでなく、新しい地域づくりというものを考える資料としてもその意味は大きいものといえる。

#### 4. テレビ番組「教科書の中にある群馬の遺跡」シナリオの作成

2 および 3 の内容を踏まえ、映像化を目的にシナリオを試作した。

##### シナリオ原案「教科書の中にある群馬の遺跡」

(現在の群馬の映像：ナレーション)

群馬県は遺跡の宝庫。古墳だけでも一万箇所もあるのです。これは全国的に見ても多い所です。古墳には自然の山と間違えるほどの大きなものもありますが、こんもりとした土饅頭のような小さな古墳もいっぱいあるのです。

最近では県内の各地で発掘調査が進められています。みなさんも一度は発掘現場を見たことがあるでしょう。これらの遺跡は、古代人たちの生活の跡。ムラの跡なのです。また、火山の噴火で積もった火山灰で埋まった水田や畠の跡もあるのです。

このような遺跡が、群馬県には二万箇所以上あるといわれています。

今回は、そのうちの教科書に載っている遺跡をご案内しましょう。案内役は群馬県埋蔵文化財調査事業団の調査研究員のみなさんです。

##### 岩宿遺跡

(教科書の紹介：ナレーション)

岩宿遺跡が発見されたのは、昭和21年。教科書に載ったのは、今から40年前の昭和31年頃になります。それ以来、現在まで教科書に載り続けています。岩宿遺跡は、それほど重要な教育資料なのです。

(上空から見る岩宿遺跡：ナレーション)

岩宿遺跡は、赤城山の西側にある稲荷山と琴平山の間にあります。今から一万年以上前には、この付近に渡良瀬川が流れていました。

この場所は、それまでは赤城山の裾野と足尾山地が接していたのです。当時の渡良瀬川はこれらの山麓の裾野を侵食していました。稲荷山と琴平山は、そのときに侵食を免れて残った山麓の一部なのです。

昭和21年。この小高い山の裾野で石器が見つかったのです。見つけた人は相沢忠洋さん。見つけた石器は旧石器時代のものでした。

(岩宿遺跡にて：調査研究員の話)

「ここが岩宿遺跡です。ちょうどこのところに赤土が見えますが、相沢さんはこの赤土の中から石器を見つけたんですね。

この赤土の上にある黒い土の中からは、縄文時代の石器や土器が出土します。相沢さんは、その下の赤土の中から石器を見つけたんです。当時は縄文時代以前の赤土の中には遺跡がないといわれていました。まだ、日本列島には人類がいなかったと考えられていたのです。実際に遺跡が見つかってもいなかったんです。」

(地層のパネル：ナレーション)

当時、学者の間では、日本で最も古い時代は縄文時代であると考えられていました。

赤土は、火山が盛んに活動をしていた頃に積もった火山灰だと考えられていたために、そんな時に人間が住めるわけはない、と言うわけです。

でも、それは歴史学者の先入観念だったのです。相沢さんは“赤土の中から石器が出土する、だから縄文時代より古い時代があったのでは”と素直に考えました。その結果が、日本における旧石器時代の存在を証明するきっかけとなったのです。

(相沢忠洋氏の映像：調査研究員の話)

「相沢さんによる岩宿の発見には二つの面がありました。もちろん、その一つは、この岩宿の発見を契機として、日本の旧石器時代研究がスタートしたことです。

そして、もう一つは、相沢さんは、学問はだれにでもできるものということを私たちに教えてくれたことなんです。誰もが自由に勉強する権利があると言うことですね。

もちろん、歴史学者や考古学者はその道の専門家です。ですから、分からぬことがあったら専門家に聞けばいい。相沢さんもそうしたんですね。それが、大発見につながったんです。」

(岩宿文化資料館：ナレーション)

岩宿の発見は、戦後の日本に大きな衝撃をもたらしました。従来の定説を覆したこと。そして、その扱い手がアマチュアの考古学徒であったこと。いずれも、打ちひしがれた戦後の世相に大きな活力を与えたからなのです。今は、遺跡の近くに資料館が建てられています。是非一度、ゆっくりと訪れてみたらいかがでしょう。

## ハート形土偶

(教科書の紹介：ナレーション)

太平洋戦争の終結間際。ハート形土偶は道路工事中に偶然発見されました。その形は縄文時代とは思えないほどの斬新なものでした。ですから、この土偶は、社会科の教科書の他に美術の教科書にも載っているのです。

(郷原駅前：調査研究員の話)

「ここは、JR吾妻線の郷原駅の前です。ハート形土偶はこの前の道路工事中に見つかったのです。終戦も間もない頃、この前に見える道の工事が行われていました。昭和16年のことです。

そして、戦後になって学界に発表されたんですが、その造形美のすばらしさから、一気に美術界でも注目されることになりました。」

(ハート形土偶の映像：ナレーション)

ハート形土偶は、顔がハート形をしているために名付けられました。土偶は、縄文時代につくられた女性像。安産を祈るお守りです。縄文時代は自然の中で生活をしていました。だから、自然におそれを感じたり、反対に自然に祈ることがあったのです。

(郷原駅前：調査研究員の話)

「土偶は安産のお守りだろうといわれています。子供たちが健康に生まれますようにとの祈りを込めてつくられたのです。縄文時代の出産は命がけだったと思います。だから、出産の時には、母子ともに健康であってほしいという気持ちが祈りとなって表れたのでしょう。

新しい命は、時代を担うあたらしい力でもあるのです。子供たちは社会を末永く維持するための宝物です。土偶は、それを物語る心の軌跡とでもいえる貴重な遺物なんですね。」

(ハート形土偶とパウル・クレーの絵画：調査研究員の話)

「ここに二枚の写真があります。一つはハート形土偶。そして、もう一つはパウル・クレーの描いた人間の絵です。パウル・クレーは現代を代表する抽象画家です。

見比べてみると分かりますが、どちらも顔がハート形をしています。顔を描くために、余分な部分を省略して抽象的な表現をしたんですね。この二つの絵を見つめると縄文人が見えてきます。」

(ハート形土偶とパウル・クレーの絵画：ナレーション)

見た目をそのまま描く技法を写実画といいます。これら二つの造形はともに顔を描こうと意識したために、不必要的部分を省略します。このような造形を抽象画といいます。

二つの造形からは、縄文人もパウル・クレーも「人」を見つめるまなざしが同じであったことを示しているのです。

(ハート形土偶および縄文土器：ナレーション)

縄文人はともすると“原始人”と認識されがちです。しかし、ハート形土偶の造形を見つめていると、私たちとの違いは、技術の進歩による違いのみであることに気がつきます。そうなんです。縄文人たちは、私たちと同じ「心」をすでに獲得していたのです。ハート形土偶はすばらしい社会を求める現代人への、心の贈り物もあるのです。

## 太田天神山古墳

(太田天神山古墳の前：調査研究員の話)

「私の後ろにある大きな山は、実は古墳なんです。山と見まごうばかりの大きな古墳。それはそ

のまま権力の大きさを示しています。この古墳が太田天神山古墳です。」

(上空から見た太田天神山古墳、教科書の紹介：ナレーション)

太田天神山古墳は地上では大きな山のように見えますが、空からみると鍵穴のような人工的な形をしていることがわかります。この形の古墳を前方後円墳といいます。

全長は210メートル。この大きな古墳は二重の堀に囲まれています。今からおよそ1500年も前の5世紀の中頃につくられました。

太田天神山古墳が教科書に掲載されている理由は、その大きさにあります。東日本で最も大きな古墳なのです。

(前方後円墳の図：調査研究員の話)

「全国で最も大きな古墳は大阪にある大山古墳です。仁徳天皇陵であろうといわれているものです。古墳の長さは486メートルもあります。岡山にある造山古墳は850メートル、奈良にある箸墓古墳は276メートル。太田天神山古墳は全国で27番目の大きさになります。大きな古墳はほとんどが近畿地方を中心とした西日本に集中しています。これは、古墳時代の中心がこの地方にあったことを示しているのです。

群馬にある太田天神山古墳が東日本最大の古墳であることは、当時の群馬県が東日本を中心地だったことを示しているのです。ここには東国で勢力を競った強大な力を持った豪族が葬られているのでしょうか。

(太田天神山古墳、石棺の前：調査研究員の話)

「ここは古墳の上です。この古墳はまだ正式な発掘はされていませんが、戦争中に高射砲の陣地がつくられたときに一部が破壊されて、豪族が葬られた石の棺がでてきました。あそこに見える白い石がその一部です。」

### 三ツ寺 I 遺跡と黒井峯遺跡

(教科書の紹介：ナレーション)

群馬ではおよそ一万箇所もの古墳がつくられました。それでは、古墳時代の豪族の生前の生活はどうだったのでしょうか。そして、当時の民衆たちはどのような生活をしていたのでしょうか。教科書に掲載されている群馬の遺跡からも、その疑問が解けるのです。

(三ツ寺 I 遺跡：調査研究員の話)

「ここは三ツ寺 I 遺跡です。この遺跡は、上越新幹線の建設で発見された古墳時代の豪族居館の跡なのです。

発掘調査は昭和56年から58年にかけて行われました。発掘は新幹線の幅12メートルの範囲だけだったために、発掘当初にはこの遺跡の性格はなかなかわかりませんでした。しかし、発掘が進むに従ってとてつもない遺跡であることがわかりはじめました。この遺跡は、それまで考古学者が長い間追い求めていた豪族居館だったのです。このことが報道されるやいなや、全国の古墳研

究者が三ツ寺 I 遺跡に集まりました。」

(古墳時代の集落遺跡、家形埴輪の映像およびイラスト：ナレーション)

群馬の大地に大きな古墳を築いた豪族たちは、生前にどのような館に住んでいたのだろう。今まで、そんな素朴な疑問が解けないでいたのです。古墳時代の遺跡は数多く発掘されていたのですが、それらのすべてが堅穴住居の集合する村の跡だったからです。

群馬では、昭和 4 年に赤堀町にある赤堀茶臼山古墳が発掘されました。この古墳からは家を形取った数多くの埴輪が発見されました。研究者たちは、この家形の埴輪を使って古墳時代の豪族の館を想定していたのです。このイラストは、赤堀茶臼山古墳を発掘した後藤守一博士が想定した豪族居館の想像図です。<sup>(10)</sup>

(三ツ寺 I 遺跡の発掘調査中の写真：調査研究員の話)

「発掘された部分は、現在は新幹線の橋脚によって失われてしまっています。当時の写真で振り返りましょう。発掘されたのは居館のほんの一部です。しかし、その部分を分析することによって全体の構造がわかります。この写真は真上から見た発掘区です。直線的な方形の区画が基本になっています。そして、所々に張り出した部分があります。これは外敵からの防御施設と思われます。館は大きな堀と強固な石垣によって守られています。内側には幾重にも重なった柵列が見つかっています。これも防御のものでしょう。内部で見つかった大型建物の柱跡は、政務を執り行った正殿の跡でしょう。後藤博士の想定した館とよく似ています。」

(黒井峯遺跡の映像：ナレーション)

それでは、このような豪族に支配されていた人たちはどのような生活をしていたのでしょうか。三ツ寺 I 遺跡の豪族居館は 5 世紀のものでした。これに対して 6 世紀の村の跡が子持村の黒井峯遺跡で発見されています。<sup>(11)</sup> この村は榛名山二ツ岳の噴火で飛んできた分厚い軽石に埋もれたまま発見されたのです。

黒井峯遺跡からは大小の堅穴住居とともに、数多くの平地住居も見つかっています。また、その傍らには稲の苗を育てた苗代や農作業に使われた家畜小屋、それに収穫された米を貯蔵しておく米倉も見つかっています。集落に接して水田や畑も見つかっています。

(黒井峯遺跡史跡整備委員会会議風景、復元イラスト：ナレーション)

今、子持村では黒井峯遺跡を復元して公開するための計画が進行しています。近い将来、教科書に載っているイラスト復元図は、現地に復元された古墳時代の村の写真に変わることになるでしょう。

そして、三ツ寺 I 遺跡では近くに“かみつけの里博物館”がオープンしました。ここでも、様々な発掘資料を元にした古墳時代の群馬の様子を学ぶことができるのです。それは、群馬の風土に根ざした農業社会の原点へのタイムトラベルになるのです。

(群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館：調査研究員の話)

「今まで、教科書に載っている遺跡や遺物をみてきました。群馬の遺跡は、群馬の文化を育んだ先人たちの生活事典なんですね。ですから、遺跡を発掘していると、古代の人たちが試行錯誤を繰り返しながら、群馬の風土の中で一生懸命生きてきた息吹のようなものを感じることができます。

今、群馬ではいたる所で遺跡の発掘が進められています。私たちの発掘の目的の一つには、開発で失われてしまう遺跡の記録をとつておくという使命があります。そして、もう一つの目的には、群馬を考えるための資料作りがあるんです。

群馬の風土の中で培われた群馬の歴史。それは、現在を考えるための有効な資料になるんです。過去の歴史を学びながら正しく今を知るということは、そこから確かな未来を創造することにつながってゆくんですね。

みなさんも、発掘された群馬の遺跡を学びながら、群馬のすばらしい未来を創造してみませんか。いま、学校では子供たちも、教科書の中で群馬の遺跡を一生懸命勉強しています。」

## 5. おわりに

群馬県では平成8年7月に発掘情報館がオープンした。この発掘情報館は、群馬県埋蔵文化財調査センターのガイダンス施設としての役割とともに、学校教育への情報提供もその目的としている。<sup>(12)</sup>ここには、教科書に掲載されているハート形土偶や古墳時代の銅鏡などの複製を用意し、実際手で触れることができるような展示も行っている。また、所蔵資料については教材としての貸し出しも実施している。このような発掘情報館の運営方針が、学校教育の中で求められる埋蔵文化財の地域教材化という方向性とも一致したものであったため、教育関係者および地域教材の開発を目指す教師の積極的な利用が高まっている。

考古学の研究は、より高度にそしてより細密になっている。しかし、必ずしも「教材化」がその延長線上にあるとは限らない。教材化や普及活動が考古学の研究成果の上にあることは言をまたないが、その内容はあまりにも個別化されているからである。また、学術研究の目的による思考法と、学校の教師がより豊かな社会を求める教材開発の思考法とは大きく異なっている点もみのがせない。この意味から学校教育と埋蔵文化財の関係を考えていくと「考古学」とは別の「埋蔵文化財学」としての研究体系が必要となってくる。

今回報告した二つの実践例は、このような現状への対応としての作業であった。教材化へ向けた教育関係者および教師への提案として理解していただきたいと考えている。これは、埋蔵文化財の教材化への端緒であり、今後、教科書に掲載される他の埋蔵文化財資料についても「埋蔵文化財学」としての視点から分析を加える必要性を感じている。また、社会科・日本史以外の教科への情報提供の方法も研究の対象であると考えている。これらの課題については、別稿を予定したい。

なお、テレビ番組については群馬県教育委員会で企画され、中日映画社によって制作が行われる。この番組は群馬テレビで放映され、収録ビデオテープが県内教育施設に配布され活用に供さ

れることになっている。

## 註

- (1) 『小学校指導書社会編』 文部省 1989  
『中学校指導書社会編』 文部省 1989  
『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』 文部省 1989
- (2) 『群馬歴史発掘最前線』 群馬県教育委員会 1994
- (3) 能登 健編著『悠久への出発—岩宿遺跡40年の軌跡—』上毛新聞社 1989  
能登 健「岩宿四〇年と相沢忠洋に学ぶこと」「歴史地理教育』449号 1989
- (4) 能登 健「土偶にこめられた縄文人の心」「東アジアの古代文化』84号 1995  
能登 健「ハート形の輪郭」「発掘のロマン最前線』毎日新聞社 1993
- (5) 能登 健「豪族の館と民衆の住まいはどう違うか」「新視点 日本の歴史 古代編』 新人物往来社 1993
- (6) 『図説群馬県の歴史』 河出書房新社 1989  
『子持村誌』上巻 子持村 1987
- (7) 能登 健、峰岸純夫編『よみがえる中世—浅間火山灰と中世の東国—』 平凡社 1989
- (8) 『女堀からのメッセージ 一地域開発を探る—』20回連載 上毛新聞 1994年2月24日～3月21日
- (9) パウル・クレーの描いた人間(左)と  
ハート形土偶(右)  
『群馬歴史発掘最前線』  
群馬県教育委員会 1994



- (10) 後藤守一による赤堀茶臼山古墳の家形埴輪の配列復元図  
『群馬県史 通史編1 原始古代1』  
群馬県 1990



- (11) 軽石の下から発見された古墳時代の村  
黒井峯遺跡  
『群馬歴史発掘最前線』  
群馬県教育委員会



- (12) 1993年6月より、学校および教育関係者向けの埋蔵文化財情報誌として『遺跡に学ぶ』を刊行している。なお、第8号(1996年12月)は発掘情報館を特集している。

本稿は、1995年度（原雅信）および1997年度（能登健）の「財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究助成金」を得た「埋蔵文化財と学校教育」の成果の一部である。